

日経 経済記事 の読み方

日本経済新聞社編

'90
年版



日本経済新聞社

日経・経済記事の読み方 '90年版

1990年1月8日 1版1刷

編 者 日本経済新聞社

©1990 Nihon Keizai Shimbun, Inc.

発行者 樋 口 剛

発行所 日本経済新聞社

〒100-66 東京都千代田区大手町1-9-5

電話 (03)270-0251 振替 東京3-555

印刷 広研印刷／製本 トキワ製本

ISBN 4-532-05930-0

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

はしがき

●経済を楽しむための準備

「社会人になって経済について勉強しなければ、と思っているのですが……」

学生や、会社に入ってから、三年くらいのビジネスマンの人たちからよく聞くフレーズです。

では、そのために何をしているかと聞くと、

「新聞で毎日、経済に関する記事を読めばいいと思うのですが、なんだかよく分からないので、二、三日で面倒になってやめてしまう」と言います。

しかし、これはちょうどプロ野球の分からない人が、ある日突然、テレビで野球中継を見ても、やっぱり「おもしろくない」と文句を言っているようなものです。

プロ野球を好きな人が、野球中継を楽しめるのは、どのチームに誰がいて、監督はこういう人間であるとか、このチームは、現在、どれだけ勝っているかというようなプロ野球に関する情報やデータを、知らないうちに蓄積しているからです。

経済についても、興味が持てるようになるだけの必要最小限の情報やデータを手に入れば、楽しみはグンと増すはずです。

●「読み方のテクニク」

経済について初心者だと思う方は、まず、「読み方のテクニク」をお読み下さい。ここでは、新聞の読み方のコツをします。つまり、新聞のどこに載っているどういう記事を読めば何が分かるのかを、丁寧に説明しました。

●「日本経済新聞の読み方」

多少でも、新聞に親しんできたなら「日本経済新聞の読み方」に進んでください。

ここでは、日本経済新聞の経済に関する記事でよく取り上げられる重要なトピックスを五十六題選んであります。それぞれは原則として、「重要ポイント」「日本経済新聞の記事」「一年の動き」「キーワード」「データ」という五つから構成されています。

初心者の方は、初めから全部を読もうとしないで、「日本経済新聞の記事」を見ながら、「重要ポイント」を読んでください。それで、何が問題になっているのかが分かってきたら、「一年の動き」や「キーワード」も読んでみてください。

「一年の動き」には、その問題に関して八九年に入ってから話題が書かれています。「キーワード」は、「重要ポイント」に出てきた言葉で、特に大切なものについての解説と関連する情報です。そこまで読んで、さらに興味がわいてきたら、次は「データ」へと進んでください。一見、とっつきにくいグラフや表などの数字情報が、身近に感じられれば、そのトピックスに関してあなたは自分自身の予想が立てられるようになっていくはずです。

●「特集とコラム」

「サンデー日経」のような特集や「会社が変わる」などのコラムは、はじめから誰にでも分かるように書かれています。これらはニュース記事と違って、書き手の考えが直接出ているものもあって、経済記事を深読みするのに役立ちます。気楽に読めて、普通の記事には書かれないような舞台裏が分かるのが、「特集とコラム」です。

一九九〇年一月

日本経済新聞社

◎ 目 次

読み方のテクニク

テクニクⅠ	経済を楽しむ方法……………	10
テクニクⅡ	経済記事を読む心構え……………	13
テクニクⅢ	ミクロを材料に、マクロで考える……………	17
テクニクⅣ	日本経済新聞の紙面構成……………	20
テクニクⅤ	総合面の読み方……………	23

日本経済新聞の読み方

●経済面

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
金融商品	技術開発・特許政策	競争政策	産業政策・中小企業政策	雇用・社会保障	エネルギー政策	景気・金融政策	自由貿易体制	通商摩擦	対外援助政策	先進国の経済協調	税制	財政
102	96	90	84	78	72	66	60	54	48	42	36	30

● 國際面

19	18	17	16	15	14
累積債務問題	石油価格	中国経済	ソ連・東欧経済	EC市場統合	米国経済
138	132	126	120	114	108

●産業面

29	流通産業	198
28	企業立地	192
27	設備投資	186
26	リストラ／ハイテク	180
25	国際化とM&A	174
24	貿易・投資摩擦	168
23	新素材	162
22	FA（ファクトリー・オートメーション）	156
21	情報化	150
20	中小・ベンチャー企業	144

●企業財務面

32	31	30
経営権問題	企業の資金調達、利益還元策	企業業績
212	208	204

●金融・為替面

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
金融ハイテク時代	金融市場のグローバル化	債券発行市場	債券流通市場	金融市場開放	金融再編成	銀行・証券の垣根見直し	金融自由化	国際通貨をめぐる協調	為替市場	日銀の新金融調節	短期金融市場
282	276	270	264	258	252	246	240	234	228	222	216

●証券面

48	47	46	45
株式の重要指標	相場表	相場分析	日々の株式相場
300	296	292	288

●商品面

52	51	50	49
商品先物	生鮮食品・消費財	産業資材	国際商品
322	316	310	304

●科学技術面

56	55	54	53
バイオテクノロジー	“超”先端技術	技術摩擦	地球環境問題
346	340	334	328

特集とコラム

●特集面

マンデー日経	354	景気指標	359
サンデー日経	356	経済教室	360
列島ワイド	358		

●コラム

月曜経済観測	361	リーダー	366	大機小機	371
底流	362	会社が変わる	367	十字路	372
データで読む	363	回転イス	368	会社研究	373
複眼	364	けいざい人	369	スコープ	374
インタビュー焦点	365	トップ群像	370	列島フラッシュ	375

キーワード索引.....

読み方の
テクニック

経済を楽しむ方法

①なぜ難しいと
感じるのか

専門用語や数字の羅列を見ているだけでは、だれだって頭が痛くなる。自分には関係ないニュースと思いつつ、経済記事を読むのは苦痛ですらある。

これに対して、スポーツ記事の場合はどうだろうか。例えば、八九年のプロ野球・日本シリーズであれば、近鉄が三勝のあと、巨人がどう戦いを進めるか、血湧き肉躍るドラマを読者も一体となって楽しめる。野球のルールは知っているし、敵味方の選手、監督の采配ぶりなども頭に入っている。読者はこのドラマに参加し、追体験する下地をもっているし、先を読む楽しみも加わるから、スポーツ記事を面白いというのであろう。

だが、中には経済記事を「これほど面白い記事はない」というひともいる。この違いはどこからくるのだろうか。実は経済記事がわかるひとは、経済をひとつのドラマとし

てとらえる目を持っているのである。それはスポーツ記事を楽しんでいるひとが野球記事を見るのと同じである。

「企業はヒト、モノ、カネが資源である」という。最近ではこの三つに「情報」を加えて、これら四要素がうまく組み合っていれば、企業は成長し業績も伸びるといわれる。つまり、優秀な人材を適材適所に配置し、風通しのよい組織を作り、消費者が欲しい製品やサービスを適切な値段で提供し、それを作るための設備の投資資金や販売のための運転資金が支障なく調達できるような企業は伸びていく。

これを野球チームに当てはめれば、試合を上手に組み立て、打者のオーダーを適切に選び、どこで何をやるかを決める監督はさしづめ社長であろう。選手は従業員、持てる力を発揮して経営計画にそって会社に貢献する。そして試合のスコアは企業の売り上げや利益の形で企業業績となって現れてくる。ダイエーが南海ホークスを、オリックスが阪急ブレーブスを買収したのは、まさにM&A(企業の合併

・買収)そのもので、企業の世界では盛んに行われている。

今度はスポーツ記事と経済記事を対比してみよう。監督の交代記事は社長の交代記事である。試合ごとの選手の登用は人事記事、投球数・打数や点数は決算記事、ホームランなどを製品記事になぞらえてもいい。だが、野球記事が一試合ごとにこれらのすべてを大なり小なり書き込んでいくのに、多くの経済記事はそのいずれかしか扱っていない。だから、全体像がつかみにくく、疎遠な感じを与えがちである。

②記事の背後に ドラマが見える

だが、個々の記事の背後では汗も涙もあるドラマが展開されている。二度にわたる石油

ショックに見舞われた日本の企業は徹底した合理化を進めたが、これは経済史の上でもまれにみる壮大なドラマであった。鉄鋼や造船などいわゆる「重厚長大」産業は不況に陥り、その半面ではハイテクを中心とした「軽薄短小」産業が成長した。「日経ビジネス」誌が最初に使い出したこのキーワードは、半導体などの小型化が新しい製品群を生み、産業や企業が盛衰していく様を端的に表現している。

一時はどんだ底にあえいだ「重厚長大」産業といえども、いつまでも不況の波にもみくちゃにされているわけではない。リストラクチャリング(事業内容の再構築)を合言葉

に本業を徹底的に見直す一方、他分野にも進出し、八七年後半からの内需景気にも支えられ復活を遂げた。例えば、「景気次第で、王様にもなれば、乞食にもなる」といわれる新日本製鉄の経常利益をみてみよう。過去最高の利益は八〇年三月期の一八二四億円だが、八九年三月期には一六〇四億円まで回復した。この間に粗鋼生産量は減り、販売単価もさがっている。これらの減収要因だけで三五〇億円にも及ぶのに、過去最高益に迫るところまできたのは、高炉五基を休止する荒療治をしつつ、固定費や変動費を思い切って圧縮し、借入金返済して金利負担を減らしてきたからである。

これが経済の世界で繰り広げられているドラマである。もちろん、この過程では人減らしの苦しみも味わったし、他方では将来の稼ぎ部門を育てるためにコンピュターソフトなどにも進出している。経済記事はこうしたドラマの断片を描きだしているわけで、読みようによっては「いま、経済記事がおもしろい」ことを実感できるはずである。

③経済記事を 読みこなすコツ

「経済記事は難しい、とつつきにくい」といわれる理由を考えてみると、いくつかの要

因が指摘できる。

その第一は、新聞である以上、昨日書いた記事は今日は

もう書かないのが原則で、絶えず新しい動きを追っていくからであろう。ひとつひとつの記事に背景や用語の説明はつけないし、すでに報道したニュースは次の記事の前提とされ、いちいち元に戻って言及することがない。それは報道したいことが山ほどあるのに、スペースが制約されているからでもある。

第二は、多くの経済記事は様々な動きを素材として報道するだけで、それをどう料理するかは読者の判断にゆだねているからであろう。例えば、「山水に役員2人派遣——ポリ・ベック／VTR戦略推進」という記事は十八行の短い記事だが、この背後には経営危機に陥った山水電氣を複合企業ポリ・ベックが買収するという、英国企業による初の日本企業のM&A報道がある。この事例には海外の経営陣が日本企業をどう運営していくか、山水がこれで再建できるのか、日本的経営は変質を迫られるのか、など多くの関心が寄せられている。だが、記事自体はこれらの点には触れず、淡々と事実を記述しているだけである。これをどう読み、次の展開をどう予測するか、読者にボールを投じているともいえる。

第三は、経済の分野の動きがあまりにも速く、知識が追いつかないことがあげられよう。ことに技術、金融の分野の変化はめざましく、専門の記者でも四苦八苦している。

金融や証券を例にとると、この大変動が始まったのは八〇年代後半からであり、それまでの国内を中心とした資金の貸し借り、株式や債券の売買という現物の世界だけでなく、将来の売買を約束する先物の世界が登場、最近では将来の売る権利や買う権利を売買するオプションの世界まで誕生している。しかもこれらの取引が複雑にからみあい、金利や為替相場を左右するようになっていく。こうなると古い知識では追いつかないのは当たり前である。経済記事が難しいのではなく、経済そのものが複雑になり、テンポが速まって難しくなっているのである。

経済記事を読みこなすコツは、これら三つの経済記事を難しくしている要因を逆手にとることである。それには第一の関門である経済用語に親しむ習慣をつけるのが早道であろう。ヒトに興味を持ってもいいし、おカネの動きに注目してもいい。自分の関心がある分野を決めて、毎日、新聞に目を通していき、ある日突然に視界が開けてくる。その時には、経済知識も自然と身についている。

経済記事を読む心構え

① インテリジェンスを磨け

CIAといえば米国の中央情報局のこと。スパイ小説や謀略の元締めとして知られているが、実はその仕事の大部分は情報を集めて分析し、米政府の政策を立案するのに役立てることにある。情報という言葉の英訳には、物事の動きや新しく発生したニュースという意味でのインフォメーションと、それを分析して先を読むという意味でのインテリジェンスがある。CIAはまさにこのインテリジェンスを担当しているわけである。

このインテリジェンス、つまり「読み」を磨くことは、社会人にとって極めて重要である。それは新聞などから沢山の情報を仕入れ、知識を得るということにとどまらない。さらに一歩進めて、これから先に起こることを予想し、起こりうる事態に対応する力を身につけることである。意識していなくても、だれでも大なり小なりこうした作業をしている。

しかし、政治には政治を読むコツがあり、経済には経済

を読むコツがある。とりわけ経済記事の場合は、経済分野がもっている特性を頭に入れておいた方が理解しやすい。その最大のポイントは、「経済現象には流れがある」ということである。スポーツ記事や社会記事は一回限り、しかも突然登場することがよくあるし、「政治は一寸先はヤミ」ともいわれる。ところが、経済記事ではある日突然に不況になったり、輸出がストップしたりということはめつたにない。

逆にいうと、日々の経済記事を丹念に読んで、流れをつかんでおくと、変化の節目がわかり、先も見えてくる。

この「経済には流れがある」という大原則から、いくつかの読み方が考えられる。それを五つにまとめてみよう。

② 経済は論理である

論理は筋であり、理屈である。一時のごまかしやムリな行動、措置、規制はいずれ矛盾が露呈し、論理のしつぺ返しを受ける。

例えば、食管理制度で管理されているおコメ。コメ不足時

代には増産を奨励し、生産者米価を高くして農家の所得を確保する上で大きな役割を担ってきたが、コメ過剰時代になっても旧態依然とした制度が続けている。その結果は消費者に見向きもされないコメまで作り、古米や古々米を生み出し、農家に減反を強いている。稲作の魅力がなくなり、農業の担い手が高齢化する一方、新規の農業従事者は減るばかりである。とはいっても、日本のおコメ市場にウマ味があることは間違いない。だからこそ米国がコメの輸入自由化を迫ったりしているし、食管を通さない良いコメ、うまいコメは高くても売れるのである。

これは生産から流通、価格までがなじがらめに縛った制度が、自由市場（競争）の論理のしつぺ返しを受けている典型的な例であり、農業関係の記事をこうした観点から読むと次に何が起こりそうかがわかってくる。

③ 経済はとまらない

「経済には流れがある」ということは、経済現象は絶えず変動する、静止することがない流れを作っていくということでもある。

例えば、モノの生産から販売までのルートを考えてみよう。原材料を仕入れ、それを工場で加工・生産し、販売のために卸問屋に回し、そこから小売店を経て消費者に購入

されたり、輸出で海外に出ていく。その間にはいろいろな段階で在庫が生じる。原材料在庫、仕掛品在庫、製品在庫、流通在庫などだが、一口に「在庫が増えた」といっても直ちに景気が悪くなる兆しとはいえない。販売が好調で原材料や仕掛品、あるいは製品の在庫が増えているのは「意図した在庫」であり、むしろ企業が先行きを強気にみている証拠である。これに対して流通段階の在庫が増え出し、それが工場での在庫増にまで波及していくのは「意図せざる在庫」であり、売れ行きが鈍ってやがては生産調整までせざるを得なくなる兆しとなる。

在庫ひとつとっても、その流れは前にも後ろにも波及していく。経済記事はこうした流れの一断面を切り取ってニュースとして伝えることが多いが、記事を読む時にはそのニュースの前後、左右に頭をめぐらせる心構えがいる。

④ 経済にいま国境はない

商品・サービスの貿易、金融取引、海外投資などを通じて、各国は相互に依存しあっている。ボーダーレス（国境がない）がいまやキーワードであり、国際的な観点を抜きにして経済は考えられない。

例えば、かつては「米国がくしゃみすると、日本は風邪をひく」といわれた。それほど日本は米国への輸出に頼っていたわけである。だが、いまや立場は逆。ザ・セイホと